

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.75-99)

<論文>

シカン支配下のモチェ
—社会の多元性についての一考察—

松本 剛 (山形大学)

The Mochicas under the Sicán/Lambayeque rule

Go Matsumoto (Yamagata University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』22, 2019, pp.75-99

<論文>

シカン支配下のモチェ

— 社会の多元性についての一考察 —

松本剛（山形大学）

【要旨】

近年、モチェ崩壊後に登場したシカンの支配下においても、モチェ人たちが継続してそのエスニシティを保持し、一定の自治を認められていた可能性が指摘されるようになり、シカン社会の多民族性や多元性に注目が集まり始めている。また、これまでの埋葬研究などから、シカンには四つの異なる民族（シカン/ランバイエケ、モチェ、ビルー/ガジナソ、タヤン）が共存していたという主張もある。当時の中心センターであった、ラ・レチェ川中流域にあるシカン遺跡はその周囲を平民用居住区によって囲まれ、中心部に暮らしていた支配者層（おもにシカン貴族）以外の人々は、そういった周縁部の居住区やさらにその周囲に広がる住居遺跡に暮らしていたと考えられている。とはいえ、具体的にどこにどの民族が暮らしていたのか、被支配者の彼らがシカン遺跡中心部での支配者主導の政治・宗教活動とどう関係し、それらをどう捉えていたかについての詳しい論考は存在しない。本論文では、シカン遺跡北側周縁部に位置するワカ・アレーナで見つかったモチェ人に焦点をあてるとともに、シカン貴族とその支配下のモチェ人たちの関係性についてボトムアップの視点から論じる。

【キーワード】

多民族性、シカン/ランバイエケ、モチェ、踏査、埋葬研究、土器分析

【目次】

1. はじめに
2. シカン社会の多元性
3. ワカ・アレーナの考古学調査
4. 大広場出土の給仕・消費土器の分析
5. 考察
6. 今後の課題
7. おわりに

1. はじめに

本研究の対象となるシカン遺跡は、先スペイン期後期にペルー北海岸北部で栄えたシカンの最初の中心的な

祭祀センターである（中期シカン期、後 950～1100 年）。モチエの政治的崩壊後の混沌の中から興ったシカンは、ラ・レチュエ川中流域（現在のポマ森林歴史保護区内）にこのセンターを建設し、10 世紀半ばまでに大規模な灌漑農耕と漁労を経済基盤にその支配体制を築いたと考えられている [Shimada 2014; Wester La Torre et al. 2014]。シカン遺跡は、大広場を中心に約二平方キロの範囲に点在する無数のピラミッド型神殿基壇群と貴族用居住区からなる（図 1）。主要なピラミッド基壇では一神教的な神（もしくは神格化された王）が祀られていた。中期シカン期の社会がどのようなものであったか（とくに社会組織や政治機構）については研究者間で意見が分かれるが、宗教的な指導者もしくは何らかの宗教的なイデオロギーによって統合されていたという点においては概ね一致している [Mackey 2000; Rucabado 2008; Shimada 1986; Tschauer 2001; Wester La Torre et al. 2014]。さらに、神殿基壇の周囲には貴族の墓地が建設され、死者が埋葬されたことがわかっている [Elera 2014, 2017; Shimada et al. 2004, 2015b]。それらの墓地は家系図を想起させるような計画的なレイアウトに沿って建設された [Matsumoto 2014; Shimada et al. 2004]。

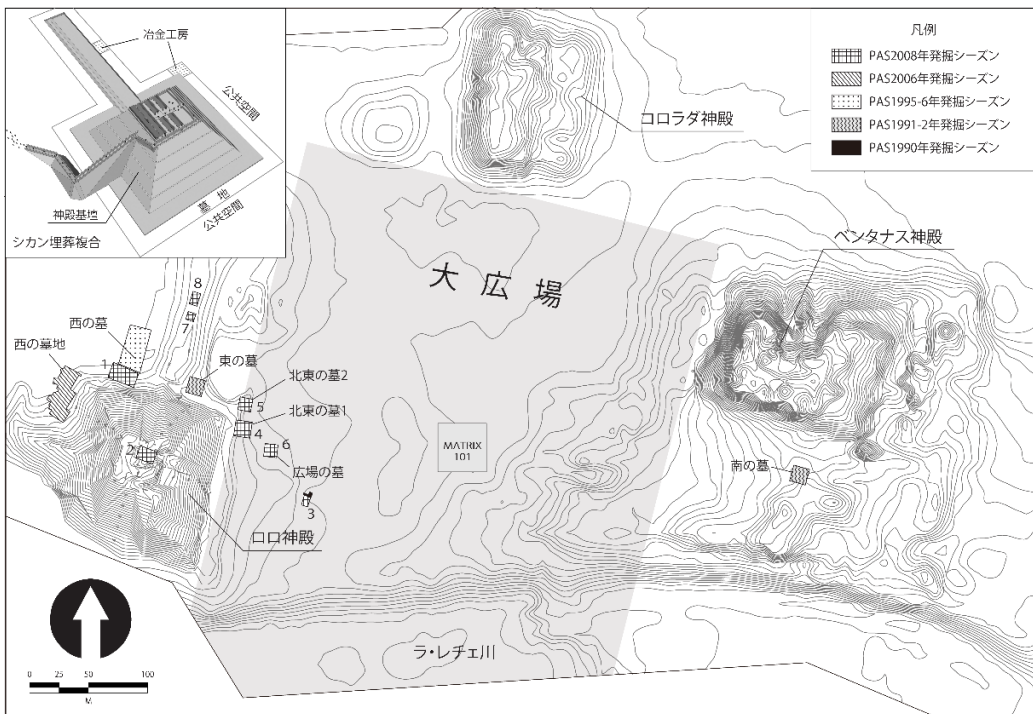


図1 シカン遺跡中心部と大広場（等高線図はルイス・カセレスおよびナタリア・グスマンの好意により提供）

墓地において遺体を埋葬した後も、貴族らは供儀を通して死者と儀礼的な交流を持続けた。本誌第 20 号にて議論したように [松本 2017]、詳細な発掘調査や徹底した遺物分析により、近くの大広場で催された大規模な饗宴では死者との共食や献酒が行われ、これと並行して遺体の埋葬準備や副葬品となる工芸品（おもに金属製品や織物）の製作も行われたことが明らかになった。世界各地の民族誌や中央アンデス地方の民族歴史学資料の渉猟、過去の考古学データの精査などをもとに、筆者はこれらをシカン貴族による祖先信仰の物質的痕跡であると結論付けた（より詳しい議論は Matsumoto [2014] を参照）。貴族らは神を頂点とした想像上のヒエラルキーを構築し、現実社会における社会階層と対応させて、支配下にある人々の心の中に社会的不平等を内面

化させようと試みた。そのヒエラルキーにおいて自らを神に次ぐ地位（現世での頂点）に置き、神格化させた祖先を通じて神との繋がりを独占した（たとえばFriedman [1984] によるカチン社会についての議論を参照）。さらに自分たちの下の階層としてモチエの元貴族を取り込み、シカン遺跡の中心部で定期的に大規模な饗宴を開いて階層間の関係を調整した。つまり、貴族らの祖先信仰は異なる社会階層に置かれた複数民族を共存させるための重要なイデオロギー戦略であった〔Matsumoto 2014〕。

この研究は、多くの新しい発見をもたらしたが、同時にそのアプローチが孕んでいる問題点や新たに取り組むべき課題も浮き彫りにした。その問題点とは、筆者による解釈はあくまで支配者の視点から見たシカンの社会構造や支配戦略についてであり、被支配者からの視点が必ずしも十分に考慮されていないという点である。こうした問題は少なからず、これまでペルー北海岸の考古学が副葬品の多い墓もしくは墓域の発掘に偏重してきたこととも関係しており、結果的に考古学者たちの視点は貴族や王族といった社会の上層部に偏りやすかった〔Alva 2004, 2008; Alva and Donnan 1993; Castillo Butters 2008; Shimada 1995; Wester La Torre 2017 など〕。しかし社会構造や動的な政治プロセスを包括的な視野で理解するためには、より低い社会階層に属する人々にも等しく焦点を当て、階層間の関係性やその変化に目を向けなくてはならない。

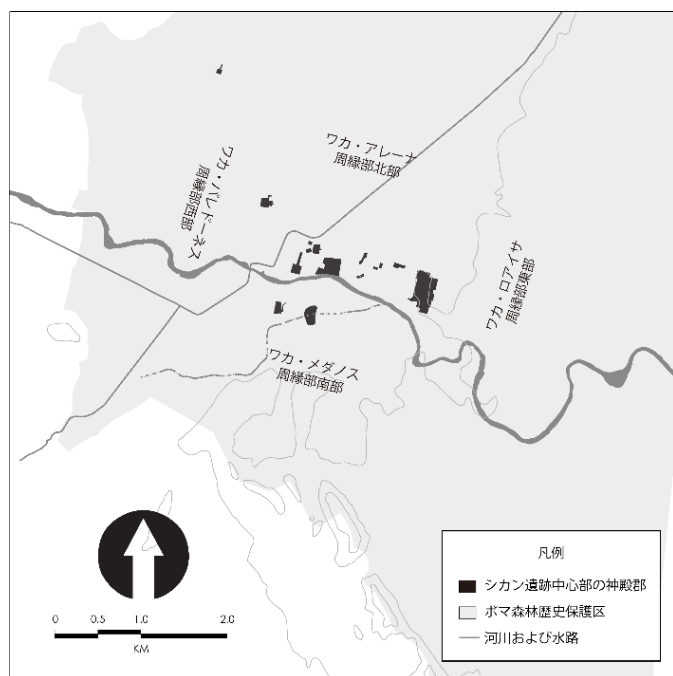


図2 シカン遺跡の北側に位置する一般居住区「ワカ・アレーナ」

周縁部に位置し（図2）、島田率いるシカン考古学プロジェクトによって1990年に簡易的に行われた踏査、遺物の表面採集、小規模の試掘により、平民たちの住居址である可能性が指摘されている〔島田 私信〕。これによって、シカン遺跡はその周囲を平民用居住区によって囲まれ、中心部に暮らしていた支配者層（おもにシカン貴族）以外の人々は、そういった周縁部の居住区やさらにその周囲に広がる住居遺跡に暮らしていたと考えられるようになった。とはいえ、それでもなお、（1）具体的にどこにどの民族が暮らしていたのか、（2）被支配者の彼らがシカン遺跡中心部での支配者主導の政治・宗教活動とどう関係し、それらをどう捉えていたかに

近年、先行するモチエ文化に属していた人々がシカン支配下でも継続してそのエスニシティを保持し、自治を認められていた可能性が指摘されるようになり〔Klaus 2003; Taylor 2002 など〕、シカン社会の多民族性や多元性に注目が集まり始めている。これまでの埋葬研究などから島田は、シカンには四つの異なる民族（シカン/ランバイエケ、モチエ、ビルー/ガジナソ、タヤン）が共存していたと主張する〔Shimada 2014; Shimada and Maguñá 1994〕。しかし、これまで一般居住区が調査対象となることはほとんどなかったため、こうした被支配者たちの暮らしの実情は何もわかっていないに等しい。数少ない例外が、本研究の調査対象のワカ・アレーナ遺跡である。

ワカ・アレーナは、シカン遺跡の北側

についての詳しい論考は存在しない。そこで本論文では、その前半において、近年筆者らが上述のワカ・アレーナにおいて実施した踏査及び試掘調査（2016～2017 年）の結果をもとに、シカン遺跡の周縁部に具体的にどのような人々が暮らしていたのかについて論じる。そして、その後半では、モチエの文化アイデンティティを持つ人々によってワカ・シアルーベ遺跡で作られたと考えられる給仕および消費土器（皿や浅鉢など）の各種分析（2010～2014 年）の結果をもとに、シカン貴族とその支配下のモチエ人たちの関係性についてボトムアップの視点から論じる。

2. シカン社会の多元性

島田 [Shimada 2014:53, Tabla 3] による 30 年以上に渡る埋葬研究は、中期シカン期の社会には上流階級に属するシカン上流貴族および下流貴族、中流階級である平民、そして下流階級の、少なくとも四つの社会階層があることを少しずつ明らかにしてきた。さらに、二つの上流階級においては、男性が女性よりもより高い地位に属していたと考えられている。表 1 は、埋葬様式の違いや、質の異なる工芸品・自然資源などの入手可能性にもとづいて社会階層が定義できることを示している^(註1) [Shimada et al. 2015]。たとえば、カラット数の高い金を使った合金製品は座位で足を組んだ状態で埋葬される上流貴族にしか共伴しないし、座位もしくは伸展位で埋葬される下流貴族はトゥンバガと呼ばれるカラット数の低い金の合金や銅メッキの製品しか入手できなかった。

社会階層の差異は、他の側面でも顕著である。たとえば、篠田によるミトコンドリア DNA サンプルの比較分析 (N=43) では、中期シカン期の貴族と非貴族民の間でハプログループの相対頻度に明らかな違いが見られた。

		First Tier		Second Tier		Third Tier	Fourth Tier
		High Elite Males	High Elite Females	Low Elite Males	Low Elite Females	Commoners	Low-Status Commoners
Grave Goods	High-Karat Gold Alloy Objects	●	●				
	High-Karat Silver-Copper Alloy Objects	●	●				
	Low-Karat Gold (Tumbaga) and/or Gilt Copper Objects	●	●	●	●		
	Silver-Gilt Copper Objects		●		●		
	Cinnabar Paint	●	●	●	●		
	Semi-Precious Stone Beads	●	●				
	Amber	●			●		
	Shell Beads	●	●	●	●		
	Spondylus princeps	●	●	●	●		
	Conus fergusonii	●	●				
	Double-Spout Bottles	●	●	●	●		
	Single-Spout Bottles	●	●	●	●	●	
	Copper-Arsenic Objects	●	●	●	●	●	
	Utilitarian Plain and Paletizada Pottery			●	●	●	●
	Ocher Paint					●	
Burial Position	Seated	●	●	●	●	●	
	Extended			●	●	●	●
	Flexed					●	●

表 1 中期シカン期の四つの社会階層
(Shimada et al. 2014:53, Tabla 3 を改変)

貴族の多くは北アンデスでより顕著なハプログループ A に属するのに対し、非貴族民の多くは中央アンデスでより顕著なハプログループ D に属することが判明した [Klaus et al. n.d.]。同様の＜貴族－非貴族＞の対比は、成長期や成人後の健康、身体的発達などを調査したファーム [Farnum 2002] による骨学分析でも明らかになっている。興味深いと同時に大変重要なことは、これら二つの社会階層の区分が、生物学的な区分のみならず、文化的アイデンティティの区分とも一致しているようだという点である。たとえばロロ神殿麓の「西の墓」のアンティチェンバー (antechamber; 中心墓室に通じる“控えの間”) には、中心墓室の南側と北側にそれぞれ 9 体ずつ女性の遺体が埋葬されていたが [Shimada 2014:376, 380, Figs. 3, 5]、このシンメトリな配置は、被葬女性たちの生物学的特徴、文化的アイデンティティ、ライフスタイル、

社会階層などの違いを同時に反映していた [Shimada 2014]。一貫してモチェ様式風の遺物が共伴する「北側の女性たち」の歯の形質は非常に多様性に富んでおり、より混成的であることから、おそらくシカンの支配下にある他の地域の出身で夫方居住の家系に嫁いだ、互いに血縁関係のない女性たち（中心墓室の被葬者の妾？）であると推測されている。これに対して「南側の女性たち」の歯の形質は均一的であり、生物学的な近似性を示唆している [Shimada et al. 2004, 2005, 2006]。ナドソン [Knudson 2014] による安定同位体分析の結果もこうした考えを支持するものであり、地域内出身者と地域外出身者の区分を示唆する同位体比の差異を明らかにしている。

筆者は西の墓における特殊な遺体配置を、中期シカン期の社会における主要な従属集団であるモチェ人たちを政治的に取り込むためのイデオロギー的な操作であるとみなしている [Matsumoto 2014]。他の考古学データを見れば、シカン貴族がモチェ人たちの文化アイデンティティに対して寛容であったことがわかる。たとえばテイラー [Taylor 2002] は、ランバイエケ谷下流域にあるワカ・シアルーペ（工房遺跡）においてシカン様式とモチェ様式“風”の土器の製作が同時に行われていたことを示し、職人たちにはかなりの自主性が認められていたと主張する (Shimada and Wagner [2007] も参照)。また、同遺跡でのクラウス [Klaus 2003] による埋葬研究は、シカン支配下でもモチェの埋葬パターン [Donnan and Mackey 1978] が継続していたことを明らかにした。埋葬プログラムに表現されたモチェ人のエスニシティの継続性については、クラウスによってさらなる研究が進められ、ワカ・シアルーペのすぐ南にある地域においても同様にモチェの埋葬プログラムが継続することが報告されている [Klaus 2008, 2009, 2014]。これらの事例は、一見すると一神教的に見えるシカンの支配者たちも、実際には配下にある諸集団にある程度の文化的・宗教的自治権を認めていた可能性を強く示唆している。

中期シカン期社会の多民族性を示唆する考古学データは他にもある。ロロ神殿西側麓の墓地内で同じ埋納用堅穴の壁龕から見つかった土偶群は、服装や髪型が大きく異なり、この時期における文化アイデンティティの多様性を示唆する [Matsumoto 2014, 2017]。また、同墓地内の別の埋納用堅穴から見つかった鍔型象形壺は下唇にラブレットを装着した女性を象っているが(写真1)、これはモチェ V 期（もしくはモチェ後期）から続く土器美術の表現であり、これと同じ装身具をピウラ川およびチラ川流域のタヤン文化の人々が



写真1 ラブレットを付けた女性を模った土器群

使用していたことが民族歴史学的にも知られている [Cordy-Collins 2010]。シカン遺跡の西8キロに位置するイジモ遺跡の中期シカン期後期の堅穴墓からはラブレット (labret) を身に付けた女性の遺体も見つかっている [Martínez 1997]。さらに、島田とマギーニャ [Shimada and Maguina 1994] は、ビルー（もしくはガジナソ）様式の短頸壺が中期シカン期の層から出土したことから、シカン人とビルー人の共存の可能性を指摘している。

このように複雑な民族的・社会的構成や不平等さからなる社会は、本質的に派閥主義的な傾向をもち、社会政治的な緊張関係を生みやすいと想定される。ところが中期シカン期の社会では武力衝突を示唆するような考古学的証拠（たとえば武器、外傷を伴った遺体、戦闘シーンを描いた美術表現、砦のような防衛用建築など）はこれまでほとんど見つかっていない。民族間および社会階層間の調和を保つためにあらゆる方策が講じられた可能性があるが、シカン貴族がエスニシティや社会階層と密接に関連した多様な埋葬様式を許容したのは、そうした試みのひとつであったと思われる。

3. ワカ・アレーナの考古学調査

ここで先の問いの一つ目に戻ろう。存在の可能性が指摘されている複数民族のそれぞれは具体的にどこに暮らしていたのであろうか。残念ながら、この問いに完全に答えることができるほどには調査は進んでいないが、筆者が2016年に上述のワカ・アレーナにて実施した考古学調査^(註2)の結果、被支配者層であるモチェ、ビルー/ガジナソ、タヤンの三つの集団のうち、モチェ人のものと考えられる居住痕跡が見つかった。

ワカ・アレーナは、東のワカ・ロアイサ、南のワカ・メダノス、西のワカ・パレドーネスとともに、シカン遺跡の中心部を取り囲む一般居住区と考えられている区域のうち、北側に位置するものである^(註3) (図2)。ラ・レチェ川の氾濫や現代の農耕作業によってひどく攪乱されている他の三つの区域に比べて、もっとも保存状態が良いことから、ここを調査区域に選定した。シカン考古学プロジェクトによる調査の結果、面積は約0.5平方キロに及び、全体的に地表面は平らだが、いくつかの小型および中型の基壇と思われる起伏があると報告されている。試掘では、シカン期に続くチムー期(後1375~1476年)の居住が確認され、時間的な制限から中期シカン期の床面までしか掘り下げられていないが、居住はこれよりさらに古い時期から始まっているという指摘もある[島田 私言]。

上述のシカン考古学プロジェクトによる簡易的な調査以外、これまでにワカ・アレーナが本格的な考古学調査の対象になったことはなかったため、詳細な踏査と地表面の観察、遺物採集、遺跡地図の作成から始める必要があった。まずは表面採集された遺物(主に土器片)の型式から相対年代を明らかにし、推定される用途からそれぞれの場所で行われていた活動の種類を推測することを試みた。住居のみならず、小規模の冶金工房などの存在も想定されたためである。また、これと合わせて、地中レーダー探査を実施し、埋蔵物の識別と地図化によってエリア内区域の空間配置と各区域の特徴(住居・公共・埋葬/祭祀空間など)を明らかにしようと努めた。地図製作では、測量の結果得られたポイントデータから基本地形図を作成し、GIS(地理情報システム)データベース内に格納・管理した。これ以降得られるすべての地図情報は、個別レイヤーとしてこの基本図の上に重ね合わせられ、後の空間分析に使用される。さらに、3シーズン目(最終年度)に予定していた考古学発掘の発掘区の選定に役立てるべく、踏査や遺物採集の結果をもとに試掘を行った^(註4)。

3-1. 踏査と表面遺物採集

遺跡内には低く連なる砂丘や基壇らしき起伏が点在し、その周辺で土器をはじめとする遺物の集積が見つかった。また、遺跡を横切るように南東から北西に向かって走る二つの灌漑用水路の痕跡も見つかった。地表面で見つかった土器片の多くは、パレテアダ(*paleteada*)土器の欠片であり^(註5)、それ以外の装飾土器はほとんど見つからなかった。器形としては、(1)調理用の丸い有頸甕(*olla con cuello*)、(2)口縁の広がった頸の長い壺(*cantaro*)、(3)貯蔵用の甕(*olla sin cuello*)がある[Cleland and Shimada 1998:135]。パレテアダ土器はランバイエケ地方において前期シカン期(後850~950年)に登場して以来、現在に至るまで長きに渡って作られ続けているが[Cleland and Shimada 1998; Day 1971; Lanning 1963]、民族考古学的研究によって、その製作技術や労働組織の継続性が強調されている[Bankes 1985; Collier 1967]。先史時代のパレテアダ土器はおもにペルー北海岸北部(パリーニャス谷からヘケテベケ谷)で広く見られ、プレス型(*press mold*)による刻印文様が多く見られる以南の地域とは対照的である[Kroeber 1925; Kroeber and Muelle 1942; Lanning 1963; Lothrop 1948]。この土器片が多数見つかったことは、このエリアが一般居住区であったという考えを強く支持するものである。



写真2 形成期後期と思われる図像が刻まれた土器片

また、パレテアダ土器片に混じってチュンゴ (chungo) ^(註6) のような冶金工房で使われる道具が見つかったことは、居住区の中に工房が併設されていた可能性を示唆している。

パレテアダ文様について詳細な調査を行ったクレランドと島田 [Cleland and Shimada 1998] は、文様の種類の違いが編年構築のための指標として使える可能性を指摘している。彼らによれば、文様は(1)ロゴ文様(クラス L)、(2)大型幾何学文様(クラス L-G)、

(3) 小型幾何学文様(クラス G) の三つに分類でき(他の分類法については Ishida [1960] や Korober and Muelle [1942] を参照)、中期シカン期(後 950~1100 年)まではロゴ文様が支配的で、それより後の時代になると幾何学文様にとって代われ、次第に文様の大きさが小さくなっていくという。ワカ・アレーナでは比較的小さな幾何学文様が多く、後期シカン期(後 1100~1375 年)を中心に居住されたことを示唆している。また、盗掘された小さな基壇の上で見つかった厚さ 2 センチほどの土器片には、形成期に特有な三白眼が刻線で描かれていた(写真2)。このエリアでの居住は比較的に早くに始まり、少なくとも形成期後期まで遡ると考えられる。

3-2. 地中レーダー探査

ワカ・アレーナでは、構造物の痕跡がほとんど地表面に現れていないため、遺跡の外周を明確に同定・定義することは現時点では不可能である。そこで、地中レーダーを使って広域に探査を実施することで、現在の地表面には見られない構造物の存在を明らかにし、居住区内の空間配置への理解を深めることを試みた。地中レーダー探査とは、高周波の電磁波を地中へ照射し、その反射波のパターンを解析することによって、地中埋蔵物の有無や種類、地質状況などを調査できる技術である。探査では、照射する電磁波の周波数の違いによって探査可能な深度や埋蔵物測定・識別の精度が異なるため、調査対象に応じて適切な機器を選択・使用しなくてはならない。また、探査後のデータ処理・解析なども専門的な知識や訓練を要する。したがって、探査は東京工業大学情報理工学研究科亀井研究室からの技術協力を得て実施した。

当初は 2 週間で全 15 区域の探査を予定していたが、各探査区において測線の設置に想定以上の時間がかかり、最終的には 4 区域のみでの実施となった(探査区 1~4)。探査区 1 と 2 は、半径 150~200 メートルほどのなだらかな砂丘の北端近くに設置した(図 3)。地表面に大量の海棲二枚貝 (*Donax obesulus*) や土器片が散乱しており、この辺り一帯は住居址である可能性が高いためである。探査区 3 と 4 は、ワカ・アレーナの北端を探るために、そこから約 380 メートル北西の森が開けた平坦な場所に設置した。

それぞれの探査区において特徴的な反射が現れたが、その深さは様々で、それぞれ地表下 0.975~1.105 メー

トル（探査区1）、1.235～1.365メートル（探査区2）、0.13～0.39メートル（探査区3）、0.325～0.455メートル（探査区4）であった。図4は、特徴的な反射が見られた深さにおけるタイムスライス図である。これらのデータ処理・解析・図化も当初の想定よりも多くの時間（約半年）を要したため、その解析結果を直ちに現場で利用することは叶わなかった。したがって、探査の後に行われた試掘の場所は、地表に見られる遺物の分布状況などから判断して決定することとなった。

さらに、調査地の土壌は塩分の含有濃度が非常に高く、本来ならアンテナに戻ってくるべき電磁波の反射波が放散してしまい検知できないという理由から、探査可能な最大深度は地表下約 1.5メートルまでと推測された^(註7)。データ取得から処理・

解析・図化までにかかる時間や、研究対象地域の土壌内塩分濃度の問題、探査対象となる土層の厚さなどを考慮し、地中レーダー探査は少なくとも本プロジェクトの目的にはあまり有効な手法ではないと結論付けた。また、後述するように、試掘によって見つかった埋葬を検知できなかったことも、こうした技術評価につながった。

3-3. 試掘

地中レーダー探査の結果を評価するとともに、3シーズン目に実施予定だった考古学発掘の発掘区を選定するため、4つの探査区のそれぞれにおいて地表面に遺物が多く見られる地点で2×2mの試掘坑を設定し、試掘を行った。それらのうちのひとつ（探査区1内の試掘坑1）では、地表から20～30cmほどの浅いところで人間の遺体が見つかった（図3および5）。地中レーダー探査の結果によれば、特徴的な反射が見つかったのは地表下0.975～1.105メートルあたりで、遺体が見つかった深さではとくに何も検知されなかった。未盗掘の埋葬であったものの、試掘坑の断面には層位が見られず、すべて同じ砂の単一層であった。また、墓坑の切り口も見つからず、遺体は突然現れた。

遺体は伸展位で頭を南方に向けて埋葬されており、主な副葬品は口の左隅に収められた紡錘車と銅製の縫い針、足先から北西約40センチの位置に置かれた石製の槌矛の頭部のみであった。埋葬体位、頭部の方位、副葬品の位置は、シカンに先行するモチエ文化の埋葬様式を示唆している [Donnan and Mackey 1978]。遺体は全体的に保存状態が思わしくなく、腰から大腿骨にかけての部分はその輪郭が分かる程度で、性別や年齢の推定に使えるのは頭骨と歯のみであった。華奢な眼窩上隆起や歯の摩耗度合いなどから、老齢の女性であると推定し

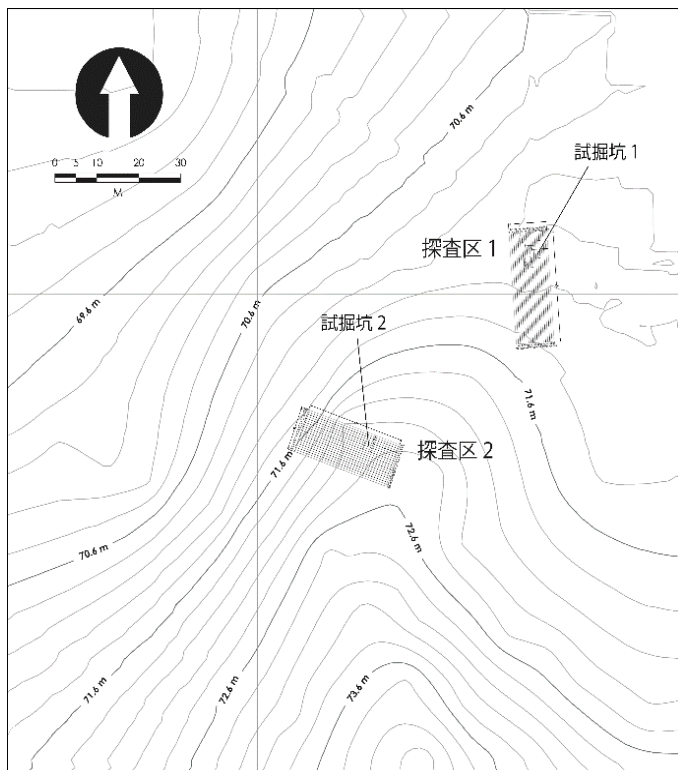


図3 ワカ・アレーナの探査区1および2

た。この地域の女性遺体は織物製作に関連した遺物が共伴することが多く、それらが副葬品として見つかったことも、この人物が女性であったという解釈を下支えしている。ところが、時代同定に使える土器や炭化物は一切共伴せず、この人物がモチエ時代のもチエ人なのか、シカン支配下のモチエ人なのかについての議論は持ち越された。

この年代に関する問題を解決するため、翌 2017 年に追加試掘を行った。試掘坑 1 を西へ拡張し、南北を長辺とする 2×5m の新しい試掘坑を T 字型になるように設定した。試掘では四つの“居住面”が確認された (SO-1~4)。ただし、これら四つのいずれにおいても試掘坑全体に広がる床面などは確認できず、一部において建造物の一部や活動の痕跡と見られるものが見つかった段階で居住面として登録した。前年の試掘同様に、試掘坑の断面には層位は見られず、こうした痕跡は単一の砂層の中から突然現れた。砂丘に同じ種類の砂が堆積していく過程で、人為的な活動が散発的に発生し、砂層の中にその痕跡を残したということなのであろう。

地表面から約 5cm の深さで露出した居住面 1 (SO-1) では、アドベを敷き詰めた床もしくは何らかの構造物の一部が見つかった。完形のまま残っていたアドベの平均的なサイズは 38cm (長さ) × 22cm (幅) × 15cm (高さ) で、形状はいわゆる「ロー・ローフ (low loaf)」と呼ばれる、上面が盛り上がり、緩やかに湾曲した食パン型であった。いずれも後期シカン期のアドベの形状的特徴に当てはまる [Shimada 1990:348, Fig. 29]。アドベ構造物の直上の砂層では、この試掘でもっとも多くの土器片 (多くはノン・ディアグノスティック

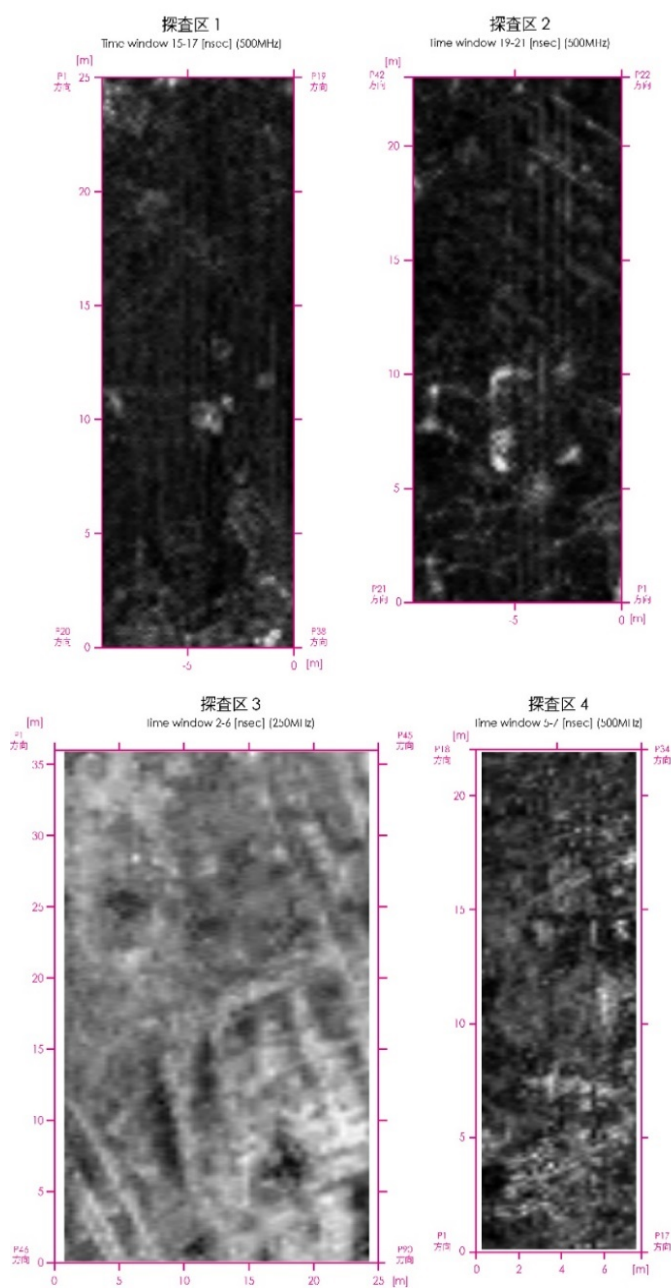


図4 特徴的な反射が現れた深さでのタイムスライス図 (左上: 探査区 1 [地表下 0.975~1.105 m] / 右上: 探査区 2 [地表下 1.235~1.365 m] / 左下: 探査区 3 [地表下 0.13~0.39 m] / 右下: 探査区 4 [地表下 0.325~0.455m] / 白黒の濃淡は、計測された反射波の振幅の強弱を可視化したものであり、反射率が大きいほど黒く、小さいほど白く表示される)

non-diagnostic^(註8) が石片や貝類とともに出土し、ワカ・アレーナは後期シカン期（後 1100～1375 年）を中心に居住されたという踏査での結果を支持している。

居住面 1 からさらに掘り進めると、試掘坑北側の地表下 20～25cm のところで、トウモロコシの穂軸の欠片を伴う、火を使った痕跡（遺構 1）が見つかったため、これを居住面 2（SO-2）として登録した。居住面 1 と 2 の間の砂層からは少量の動物骨と土器片が見つかったが、これに中期シカン期の還元焼成による黒色磨研壺の欠片が含まれていた。これは、前年に老女の遺体が見つかったのとはほぼ同じ深さであり、水平堆積の砂層は攪乱されていない。これにより、先の人物はシカン支配下にあったモチエ人であり、ワカ・アレーナでモチエの人々の

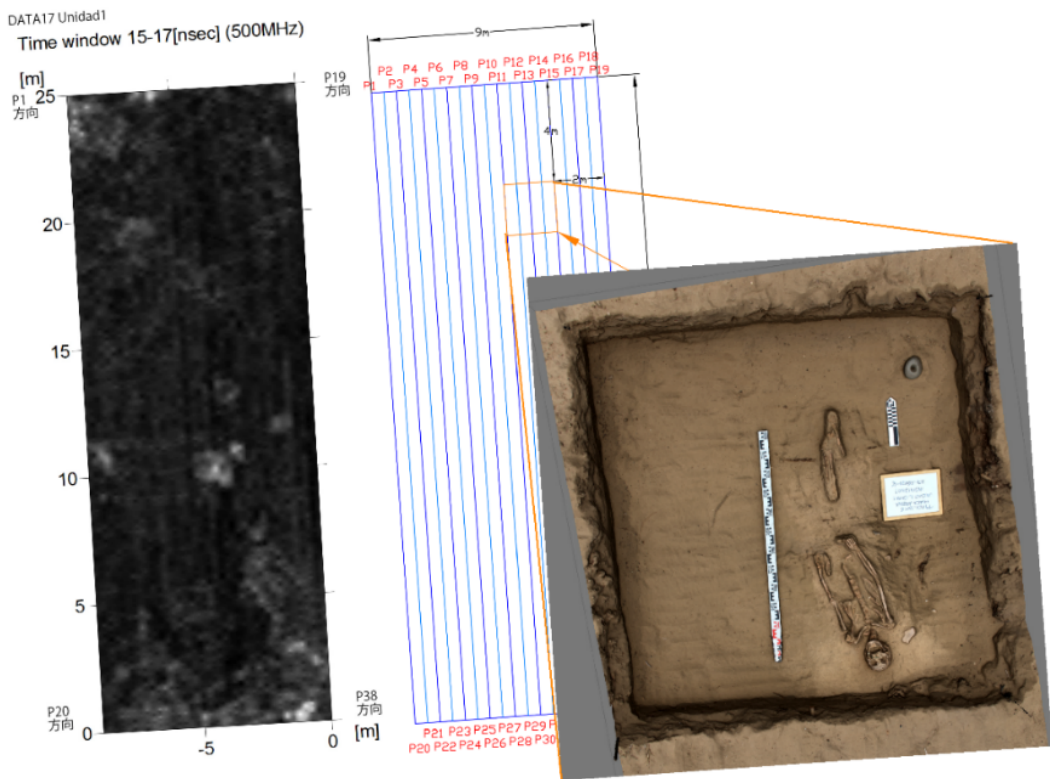


図5 探査区1の解析画像（左）と試掘坑1で見つかった老齢の女性の埋葬（右）

活動が行われていたことが明らかになった。

居住面 2 の下からは、炉の存在によって定義された、さらに二面の居住面（SO-3 および 4）が見つかった。それぞれ、地表下約 150cm および約 190cm のところで露出した。いずれも土器片と貝類、石片を伴っていたが、遺物はそれほど多くなく、年代同定に使える土器片も皆無であった。居住面 3 では試掘坑北側で一つ（遺構 2）と南側で二つの炉（遺構 3A および 3B）が見つかったが、遺構 3B から採取したアルカロボ（*algarrobo*）の燃えさしで放射性炭素年代測定を実施したところ、 2866 ± 23 BP（ラボ ID：YU-7965／校正年代：1059-900 cal BC）という形成期中期を示す年代が得られた。居住面 1 から 2（中期シカン期から後期シカン期）の時期には継続的に居住されていたと考えられるが、居住面 2 から 3 の間には中期ホライズンやモチエ期の居住の痕跡は

なく、現時点では、ワカ・アレーナは少なくとも（上述の写真2の土器片が作られた）形成期後期の後、中期シカン期まで居住されていなかったと考えるのが妥当であろう。

4. 大広場出土の給仕・消費土器の分析

さて、ここで先の問いの二つ目に移ろう。シカン遺跡の周縁部や周辺遺跡に暮らしていたと考えられている、シカンとは異なる文化アイデンティティをもった人々（おもにモチェ人）は、中心部でのシカン支配者主導の政治・宗教活動とどう関係し、それらをどう捉えていたのであろうか。こうした中心部の支配者層と周縁部の被支配者層の関係性を被支配者の視点から明らかにするには、ワカ・アレーナでの調査データでは不十分であるが、手がかりのひとつがシカン遺跡中心部の大広場にて出土した土器の分析調査（2010年）において見つかったので、ここに詳述する。

4-1. 分析対象土器

分析対象となった土器は、2008年にシカン考古学プロジェクト（団長：南イリノイ大学・島田泉教授）によって実施された大広場での発掘において出土したものであり、中期シカン期から後期シカン期前半にかけて祖先を追悼するために催されたと考えられる大規模な饗宴の際に使われた給仕および消費土器、つまり皿や浅鉢などである。「ディアグノスティック^(註8) (diagnostic)」として採取された全4085点の土器片のうち、2364点（約58%）がこのグループに属する。まったく無装飾のものと、外面に型によるレリーフ文様や内面に彩色が施されたものがある。装飾土器には「海岸カハマルカ^(註9)」の名で知られる浅鉢も含まれる。

機器中性子放射化分析（INAA）の結果、これらの皿や浅鉢の組成は、天然の混和剤に由来すると考えられる多くのカルシウムを含むグループ（BDP1）と多量のヒ素とウランウムを含む二つのグループ（BDP2および3）の三つのグループに分類できることがわかった〔Matsumoto 2019〕。BDP2と3にヒ素が多く含まれるのは、これらの土器が土器とヒ素青銅器を同時に製作するマルチクラフト工房（multi-craft workshop）で作られたことを示唆している。ランバイエク地域では工房遺跡はこれまでワカ・シアルーペやパンパ・デ・ロス・ブロスなどで確認されているものの、マルチクラフト工房に限定すると、現時点ではワカ・シアルーペ以外にない。ランバイエク川下流域に位置するワカ・シアルーペ遺跡は、シカン遺跡から南西18キロほどのところに位置し、モチェの文化アイデンティティを持つ職人たちがシカン貴族の管理下で土器とヒ素青銅製品を同時製作していた〔Shimada et al. 2003a, 2003b, 2003c, 2003d; Shimada and Wagner 2007; Taylor 2002〕。さらに、BDP1の胎土は、モンテネグロ〔Montenegro 1997〕が岩石分類学的分析によって「サーニャ谷やヘケテペケ谷などの近隣地域から持ち込まれたものであろう」と結論付けているものに類似している。これらの結果から、大広場で使われた皿や碗の大部分は地域内（おそらくワカ・シアルーペ遺跡）で作られ、一部のみが招待客などによって近隣地域（サーニャ谷やヘケテペケ谷）から持ち込まれていたと考えられる〔松本 2017; Matsumoto 2019〕。

4-2. 口縁の形状および厚みのばらつき

大広場から出土したこれらの土器片の形状および製作技術について分析を行ったところ、口縁の形状や厚みに大きなばらつきがあることや、口縁や器壁、台座などに、いくつもの変形や成形上の不規則性が見られることが分かった。サイズのバリエーションは少ないが、口縁の形状および厚みのばらつきはきわめて顕著であった〔Matsumoto 2014:483-484〕。さらには、同じ層の同じ場所から出土した土器片の中でさえ、様々な形状や厚さ

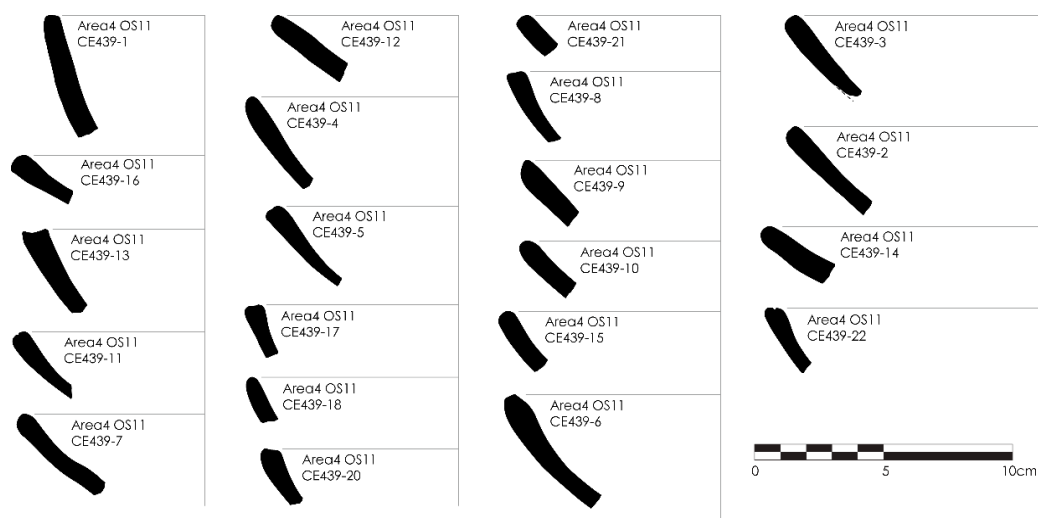


図6 口縁の形状や厚さにばらつきが見られた土器片

のものが観察された(図6)。これらの土器片にみられる形状の不規則性は、大広場で使用された給仕・消費土器の生産品質に一貫性がなかったことを示している。いくつかの民族考古学的研究は、口縁の形状・厚さ・角度、器全体の割合など、手捻りの土器の形状的特徴を注意深く観察・測定することによって、個々の陶工の仕事を識別できると主張している[Arnold 1993:193; London 1991:193; Longacre 1991:102-103, 1999:48-49; Nicholson and Patterson 1992:33]。この主張に沿えば、今回記録された口縁の形状と厚みのバリエーションは、手作業による成形プロセスに携わる多くの個人の存在、あるいは複数の陶工が関わる多くの小規模生産現場の存在を示唆するのかもしれない。

一方、本論文で分析対象となった土器の

中には、一つの完形土器においても口縁の形状や厚みが一貫していない、つまり口縁部の仕上がりが一定でないものがあった。ここで確認された土器片のバリエーションは、土器個体間の形状的なばらつきに加えて、一個体の土器における不均質な仕上がりの結果もたらされたものと想定できる。また、口縁の形状や厚みのばらつきのみならず、非常に不規則な変形も確認されている。たとえば図7に示すように、口縁部が潰れたり、何かで打ち付けられたり、台座の一部が潰れていたり、壁面が不規則に波打っているものが数多く見受けられる。ま

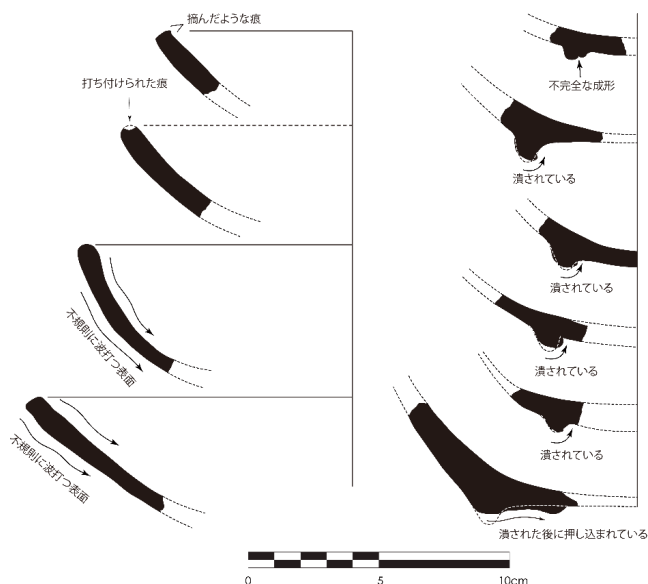


図7 変形や歪みが見られる土器片



写真3 型への粘土の押し込みが不十分な土器片



写真4 不完全焼成もしくはほとんど焼かれていない土器片

た、型を使って作られた器の中には、型入れの際に粘土が十分に押し込まれずに（型に当たる外壁面に）小さな隙間を残しているものがある（写真3）。さらには、焼成が不十分な土器片も数多く見つかっており（写真4）、それらのうちのいくつかはほとんど焼かれておらず、その胎土は指や爪で簡単に細かく砕くことができるほど柔らかい。

このように、大広場で使用された給仕・消費用土器の分析によって確認された製作技術上の特徴は、製作された土器の品質が悪く一貫性がなかったことを意味している。すなわち、土器片に見られた形状的・技術的なバリエーションは、複数の陶工が関わるような多くの小規模製作現場の存在を示唆しているというよりも、むしろ陶工による土器製作の粗雑さと杜撰さを強く表していると言えよう。もちろん、性急に行われた製作作業に伴い、作業に不慣れた新規の陶工が増員されたため、生産品質を一定に保つことができなかったことも想定する事象である。

5. 考察

5-1. 武器とともに埋葬されたシカン支配下のモチェ人女性

ワカ・アレーナでの踏査や試掘からはシカン社会の多元性を論じるための重要な情報が得られた。踏査結果は、ワカ・アレーナを一般居住区とする島田らの考えを支持するものであった。住居址と考えられる探査区1での試掘からは、中期シカン期の土層からモチェの埋葬様式で埋葬された女性の遺体が見つかったことから、シカン支配下でもモチェ人の文化アイデンティティを保持していた人々の存在が明らかになった。

このモチェ人は、先の中期シカン期の社会階層区分（表1）に従えば、遺体の体位や副葬品から、平民もしくは最下層民に属していたと考えられる。この最下層民の墓に石製の槌矛の頭部が副葬されていたことは特筆に値する。これは、中央の穿孔に木製の柄などを差し込んで武器として使うものである。ただし、使用痕らしきものは見当たらなかった。すでに述べたように、これまでに行われた中期シカン期の神殿基壇などの記念碑的な建造物やエリートの墓域などを対象とした発掘では、武力衝突を示唆するような考古学的証拠はほとんど見つかっていない。今回、中期シカン期のモチェ人の墓から武器が見つかったことは、この時期にまったく緊張関係や武力衝突がなかったわけではない可能性を示唆している。シカン遺跡中心部の支配者層であるシカン貴族らへの敵対心の現れなのかもしれない。

また、形成期中期の居住面 3 から中期シカン期の居住面 2 の間には中期ホライズンやモチエ期の居住の痕跡は見つからなかった。少なくとも形成期後期の後、中期シカン期まで居住されない空白期間があったとすると、ここに暮らすモチエ人たちはいつから居住を開始したのだろうか。現時点ではこの問いに適切に答えられるだけの十分なデータが入手できていないが、シカン遺跡中心部にシカン貴族が居住し始めたのと同じ時期に彼らも外部から移り住んできた可能性がある。

2017 年の調査の後、上記の試掘で見つかった女性遺体の安定同位体分析を実施した。第 1~3 大臼歯と右上腕骨から採取した 4 つの試料に含まれる炭素および窒素の同位体比から、この女性の食性や移動履歴を推定し、シカン遺跡の周縁部に暮らす人々の生活史の復元に役立てることを目的とした。また、移動履歴を論じる際の在地性の基準として、遺跡のあるポマ歴史森林保護地区内およびその周辺で飼育された現生ヤギの歯エナメル質のストロンチウム・酸素同位体比を測定した。この女性遺体を含めて、異なる社会階層に属していたと思われる人物の遺体の分析結果を蓄積していくことで、最終的には階層ごとの食性がどのように異なるのかを明らかにするためである。既述のように、探査区 1 の地表面には大量の海棲二枚貝 (*Donax obesulus*) が散乱・堆積しており、海産資源を消費していたことが明らかである。しかし、いずれの試料からもコラーゲンを抽出できず、炭素／窒素の同位体比は得られなかった。

5-2. 土器製作に現れるモチエ人たちのシカン貴族への敵対心

シカン遺跡・大広場での饗宴跡から出土した土器の分析では、給仕および消費用の皿や浅鉢に限って、形状的・技術的不規則性が顕著であることが明らかになった。こうした不規則性が示す生産品質の一貫性の欠如は、陶工らの仕事がかきわめて粗雑であり、杜撰であったことを示している。このように陶工たちの仕事が粗雑であることは、何を示しているのだろうか。

筆者はこれをモチエ陶工たちのシカン貴族や彼らの祖先崇拜信仰に対する無関心さや、もしかしたらある種の反発心の表れではないかと見ている。シカン遺跡の周辺に暮らしていた被支配者層は、それぞれ工芸品製作という義務を果たしつつも、中央の権力に忠実だった者もいれば、反発心を抱いていた者もいたのではないかと。興味深いことに、上述のような形状的・技術的不規則性は給仕・消費用の皿や浅鉢のみに見られ、甕や壺、水差しのような他の器形グループでは有意なレベルで確認されなかった。とくに貯蔵用と見られる甕 (*olla sin cuello*) は成形も丁寧で、固く焼き締められており、皿・浅鉢とはまったく品質が異なっていた。筆者にはこの給仕・消費用土器のみに見られる生産品質のばらつきこそが、各陶工の仕事に対する姿勢を色濃く反映しているように思えてならない。つまり、反抗的な陶工たちは、貴族が直接手にすることがわかっている給仕・消費用土器に的を絞って、意図して粗雑に作ったのであろう。

シカン遺跡を中心に繁栄した中期シカン社会は比較的短命で 11 世紀末には終焉を迎えた。従来説によれば、1020 年頃から 30 年間続いた大旱魃とそれに続く大洪水によって経済的な大打撃を受けた中期シカン社会では、自然を司るシカン神への信仰が揺らぎ、その結果、灌漑農耕や冶金活動などによって大きな負担を負わされていた一般民衆が反乱を起こし、神殿に火を放ったと考えられてきた [Shimada 1990]。ワカ・アレーナでの調査や大広場出土の土器分析の結果は、こうした一般民衆らによる暴力的行動の直接的な証拠を提供するわけではないが、シカン貴族による統治に不満を抱いていた者の存在を示唆している。実際に一般民衆が武装蜂起したか否かは別として、9 世紀の中頃に興り、100 年余りの短い間に一大勢力へと急成長したシカン政体が、その経済的發展を下支えした人々に大きな負担を強いていたことは間違いないだろう。

6. 今後の課題

シカン遺跡の周縁部やその周辺遺跡に暮らす被支配者層は、遺跡中心部での支配者主導の政治・宗教活動とどう関係していたのであろうか。中心部での政治・宗教的变化に呼応して、周縁部でも何らかの変化が起きたのであろうか。とくに、支配者層が様々な変化を経験していた11世紀末の激動の時期に、周縁部の被支配者層にはどのような変化が起っていたのか。そして、そうした変化は物質文化にも反映されたのであろうか。

こうした問いに答えるべく、本研究をさらに推し進めるためには、さらなる踏査と発掘調査が必要である。踏査によってすでに存在が確認されている小型基壇については、その建築様式を精査し、建設年代を推定する必要がある。また増改築の有無やその機能、周囲との位置的・時期的関係についても考察しなくてはならない。また、住居址の発掘を急ぐ必要がある。発掘後は、出土した土器や飲食物残滓の分析が効果的であろう。土器については通常の実測や分類に加え、混和剤の顕微鏡分析や、胎土の組成から原料産地や生産地を推定する。また、飲食物残滓の分析では、消費された飲食物の種類や量を明らかにし、原産地を推測する。このように工芸品や食糧の生産システム、流通経路を明らかにすることで、中心部と周縁部の経済基盤の違いの有無を確かめることができる。また、安定同位体分析におけるコラーゲン抽出の難しさも、試料数が増えることによって解決できる。

こうして様々な側面から考察することによって、シカン遺跡の周縁部に暮らしていた被支配者層の日常生活における諸活動とその変化が浮かび上がるはずである。ワカ・アレーナでのさらなる調査は、シカン社会における多元性や、中心部の支配者層と周縁部の被支配者層の関係性を明らかにするための新たなデータを提供してくれるであろう。

7. おわりに

本研究では、2017年に本格化したエル・ニーニョ南方振動による大雨の影響で調査地の植生密度が高まり、調査の大きな妨げになったことに加えて、地中レーダー探査や安定同位体分析から期待した結果が得られないという不運にも見舞われた。ところが、その一方で、踏査や試掘はきわめて重要な知見をもたらした。シカン遺跡の周縁部北部のワカ・アレーナが非貴族民たちの居住区であると同時に、そこにシカン支配下でもモチエ人としての文化アイデンティティを維持しながら暮らしていた人々が存在した可能性が浮かび上がってきた。彼らを含む、シカン遺跡の周辺に暮らしていた被支配者層は、工芸品製作などの責務を果たしつつも、それが支えていた貴族中心の宗教信仰や儀礼活動には必ずしも意義を見出していなかったのではないか。遺跡中心部で貴族らが祖先を追悼する饗宴で使用した皿・浅鉢の形状的・技術的不規則性から推察される製作作業の杜撰さは、そうした意識や姿勢の反映であると解釈した。後期シカン期からチム一期の土器も継続して出土することから、ワカ・アレーナは中期シカン期の末期にシカン遺跡中心部の神殿群が放棄された後も、継続して居住されていたと考えられる。このようにしてモチエ人の文化アイデンティティはその後も保持され、クラウドが指摘するように、植民地時代に至るまで生き延びたのかもしれない。

【謝辞】

本研究における二度の現地調査（2016 および 2017 年）と遺物分析（2010 年）は、日本学術振興会特別研究員奨励費（JP16J09126／研究課題名『古代アンデス文明における都市の社会動態についての研究』）とアメリカ国

立科学財団（助成番号 NSF-BCS-1339599／研究課題名『Integrative role of ancestor veneration in the multiethnic Middle Sican state (AD 950-1100): A perspective from food practices』）の助成を受けたものである。また、二名の匿名査読者には原稿の細部まで注意深くお読みいただき、とても適切で有益なご助言を戴いた。ここに深謝の意を表する。

註

- (註1) 欧米考古学にはかつて「葬送儀礼における物質的な豊かさと当該社会の複雑さは正相関の関係にある」と想定していた時期があった（いわゆる *representationist approach*）。これに対して、1970 年代末からの 20 年間に、*mis-representationist* と呼ばれる考古学者たちがこの規定された相関関係を覆し、遺された者たちの介入によって死者の扱いは大きく変動する可能性を指摘しはじめた [Cannon 1989; Hodder 1982; Metcalf and Huntington 1991; Parker Pearson 1982]。シカンでは、*representationist* たちが主張したように、社会的な属性が埋葬プログラムにある程度忠実に反映される。
- (註2) ワカ・アレーナの調査は、筆者が日本学術振興会特別研究員 PD の奨励費を利用して 2016 年に立ち上げた三年間の研究プロジェクトであり（Proyecto de Investigación Arqueológica Complejo Lambayeque 2016～2018）、これまで中央政権の形成・発展・崩壊のプロセスによって定義されてきたシカン成立から終焉まで約 500 年間の“支配者たちの歴史”を、平民たちの日常生活に注目することによって被支配者の視点から見直すことを主眼としたものである。ここでは支配権力を一方的で強制的なものと捉える従来の国家論からは距離を置き、被支配者たちのエージェンシーを重視した。多民族社会であるシカンにおいては、＜支配／被支配＞という単純な二項対立に囚われず、社会構成集団間の関係性や相互作用に注視しなければ、社会の全体像を包括的に把握する事は不可能である。そこで、雑多な社会集団が居住していたと考えられているシカン遺跡周縁部の居住区を調査し、そこでの日常生活における諸活動とその通時的変遷をとらえることによって、シカン遺跡中心部の調査データに依拠する、筆者のこれまでの一面的な視点を克服することを目指した。とくに遺跡中心部において様々な変革が生じた時期に周縁部では何が起こっていたのかという点に注目した。これまでの被支配者たちの受動的で従属的なイメージに囚われず、彼らが中央政権との関わりの中で変革の時代をどのように生き抜いたのかを明らかにし、変革期の社会的動態をより多角的に、より包括的に理解することがプロジェクトの最重要課題であった。ただし筆者の就職にともなう PD の中途辞任によって、結果的には二度の現地調査を含む 1 年半の短期プロジェクトとなり（PIACL2016～2017）、3 シーズン目（最終年度）に予定していた大規模発掘は実現しなかった。
- (註3) 1970～1980 年代にシカン考古学プロジェクトによって作られたシカン遺跡の地図は 2 つあり、1981 年発表のもの [Shimada 1981:410, Figure 6] と 1982 年発表のものとは、ワカ・アレーナの位置が異なる。1981 年発表の地図によれば、ベンタナス神殿の真北約 1 キロのところに約 0.25 平方キロメートル相当の楕円（長軸直径 750m [南北]×短軸直径 420m [東西]）で示されており、Shimada [1981] に記載された面積のおおよそ半分である。一方、1982 年製作の地図には、ベンタナス神殿の北東 600 メートルあたりに位置すると示されており、ラ・レチュエ川とパコラ川をつなぐ現在のポマ水路の東岸沿いということになる。2016 年の踏査では最初に、島田とともに試掘を行ったという現地労働者を伴って遺跡の正確な場所とその範囲を明らかにしようと試みた。彼が向かったのは 1982 年製作の地図に示された地点の近くで、ワカ・アレーナはポマ水路沿いに、東岸ではなく西岸にあると主張し

たが、その近辺で遺跡らしきものを見つけることはできなかった。2001年にボマ森林歴史保護区として指定されて以来、森の植生密度は高くなる一方で、景観が大きく変わってしまっていることも大きく影響していると思われる。保護区を管理する環境省自然保護区監督庁（Servicio Nacional de Áreas Naturales Protegidas por el Estado）のスタッフの協力によってようやく遺跡の場所を突き止めることができたが、それは1981年発表の地図に示された場所よりも250メートルほど北西に行った場所で、その範囲は報告されている0.5平方キロメートルに近いことが明らかになった。

- (註4) 上述(註2)のように調査期間が短縮されたため、大規模発掘は実現しなかった。
- (註5) パレテアダ (*paleteada*) 土器とは、調理や貯蔵のために日常的に使われる実用土器で、パドルと石を使って成形される。成形時にパドルに刻まれた文様が土器の外壁面に刻印されることから、パレテアダの名が付いた [Cleland and Shimada 1998]。パドルは土製、木製、石製のものがある。
- (註6) チュンゴ (*chungo*) とは石製のすりこぎ棒のことで、バタン (*batán*) と呼ばれる石臼とセットで用いられる道具である。ペルーやボリビアにおいて、先史時代から現代に至るまで使われている。メキシコにおけるマノ (*mano*; すりこぎ棒) とメタテ (*metate*; 石臼) に相当するものである。現代においては、おもに食材をすり潰すのに使われるが、シカン時代には鉱石を砕いて有用な金属を採取するために使われた [Shimada 1995]。シカン遺跡のあるラ・レチェ中流域はかつて「バタン・グラウンデ」の名で知られていたが、これは大きなバタンが大量に見つかっているからである。
- (註7) 上述のように、踏査ではワカ・アレーナの最も古い居住時期は形成期後期まで遡ることが明らかになったが、形成期後期の土器が見つかった盗掘坑の深さは2メートル以上あった。形成期後期の居住面は、探査可能な1.5メートルよりも深い可能性が高い。
- (註8) 本研究では、対象となる土器片の形状的・技術的・装飾的特徴のすべて、またはいずれかによって、元の土器の器形や機能のある程度推測できる場合、「診断に用いることができる特徴を備えている」という意味で、その土器片を「ディアグノスティック (*diagnostic*) 」と呼ぶ。また、この条件を満たさないものを「ノン・ディアグノスティック (*non-diagnostic*) 」と呼ぶ。土器片の採取・分析においては、通常「ディアグノスティック」とみなされる土器片のみを対象とする。
- (註9) 海岸カハマルカとは、リング状の台座のある皿もしくは浅鉢の器形をもち、内側に乳白色のスリップを施した上に赤や黒の曲線模様を彩色した土器で、中には三脚をもつものもある。後期中間期に北部山地のカハマルカ文化の影響のもとで北海岸に生まれた土器様式であると考えられており、起源であるカハマルカ土器がカオリナイトを主成分とする乳白色の粘土 (カオリン) で作られるのに対して、海岸カハマルカはカオリンを使わずに地域内の粘土で作られる点で区別できる [Montenegro 1997; Montenegro and Shimada 1998]。モンテネグロ [Montenegro 1997] は、海岸カハマルカ土器のバリエーションを器表面の仕上げの違い (スリップ施工、磨き、曲線文様の色や線の太さなど) にもとづいて (1) ラ・レチェ川〜ランバイエケ川流域の「シカン彩色皿 (Sicán Painted Dishes/SPD)」と (2) サーニャ川〜ヘケテペケ川流域の「海岸カハマルカ変種 (Coastal Cajamarca Variants/CCV)」の二つに分類し、地域間の差異を主張している。また近年、ツァイ [Tsai 2016] がヘケテペケ中流域にあるラス・バラス遺跡での調査結果をもとに、海岸カハマルカは海岸地帯ではなく、海岸から40〜100キロ内陸に入った標高300〜1000メートルの河川中流域 (いわゆるチャウピユンガ) で興った土器伝統であると主張している。

参考文献

Alva, Walter

- 2004 *Sipán: Descubrimiento e investigación*. QW Editores S.A.C., Lima.
- 2008 Las tumbas reales de Sipán. In *Señores de los reinos de la luna*, edited by Krzysztof Makowski, pp. 266-279. Banco de Crédito, Lima, Perú.

Alva, Walter, and Christopher B. Donnan

- 1993 *Royal Tombs of Sipán*. Fowler Museum of Cultural History, University of California, Los Angeles.

Arnold, Dean E.

- 1993 *Ecology and Ceramic Production in an Andean Community: A Reconsideration of the Evidence*. New Series in Archaeology. Cambridge University Press, Cambridge.

Banks, George

- 1985 The Manufacture and Circulation of Paddle and Anvil Pottery on the North Coast of Peru. *World Archaeology* 17(2):269-277.

Cannon, Aubrey

- 1989 The Historical Dimension in Mortuary Expressions of Status and Sentiment. *Current Anthropology* 30(4):437-458.

Castillo Butters, Luis Jaime

- 2008 Prácticas funerarias de élite en San José de Moro. In *Señores de los reinos de la luna*, edited by Krzysztof Makowski, pp. 288-293. Banco de Crédito, Lima, Perú.

Cleland, Kathryn M., and Izumi Shimada

- 1998 Paletada Potters: Technology, Production Sphere, and Sub-Culture in Ancient Peru. In *Andean Ceramics: Technology, Organization, and Approaches*, edited by Izumi Shimada, pp. 111-150. The University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Collier, Donald

- 1967 Pottery Stamping and Molding on the North Coast of Peru. In *Peruvian Archaeology: Selected Readings*, edited by John H. Rowe, and Dorothy Menzel, pp. 264-274. Peek publications, Palo Alto, CA.

Cordy-Collins, Alana

- 2010 Labretted Ladies: Foreign Women in Northern Moche and Lambayeque Art. In *New Perspectives on Moche Political Organization*, edited by J. Quilter and L. J. Castillo Butters, pp. 247-256. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Day, Kent C.

- 1971 *Royal Ontario Museum Lambayeque Valley (Peru) Expedition Quarterly Report*. Submitted to On file at Royal Ontario Museum, Toronto.

Donnan, Christopher B., and Carol J. Mackey

- 1978 *Ancient Burial Patterns of the Moche Valley, Peru*. University of Texas Press, Austin.

Elera, Carlos

- 2014 El Museo Nacional Sicán como centro de investigación, conservación, defensa y difusión del patrimonio Cultural Sicán del Perú y el mundo. In *Cultura Sicán: Esplendor preincaico de la costa norte*, edited by Izumi Shimada, pp.

- 363-375. Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.
- 2017 Secuencia del programa funerario y fases constructivas del templo-mausoleo de Huaca de Las Ventanas del núcleo cultural Sicán, Santuario Histórico Bosque de Pómac. In *Lambayeque: Nuevos Horizontes de la Arqueología Peruana*, edited by Antonio Aimi, Krzysztof Makowski, and Elimia Perassi, pp. 103-132. 2nd ed. Ledizioni, Milano, Italia.
- Farnum, Julie F.
- 2002 *Biological Consequences of Social Inequalities in Prehistoric Peru*, Ph.D. Dissertation. Dissertation, Department of Anthropology, University of Missouri, Columbia.
- Friedman, Jonathan
- 1984 Tribes, States, and Transformations. In *Marxist Analyses and Social Anthropology*, edited by Maurice Bloch, pp. 161-202. ASA Studies. Tavistock Publications, London.
- Hodder, Ian
- 1982 *Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture. New Studies in Archaeology*. Cambridge University Press, New York.
- Ishida, Eiichiro
- 1960 *Andes: The Report of the University of Tokyo Scientific Expedition to the Andes in 1958*. Bijutsu-Shuppansha, Tokyo, Japan.
- Klaus, Haagen D.
- 2003 *Life and Death at Huaca Sialupe: The Mortuary Archaeology of a Middle Sicán Community, North Coast of Peru*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.
- 2008 *Out of Light Came Darkness: Bioarchaeology of Mortuary Ritual, Health, and Ethnogenesis in the Lambayeque Valley Complex, North Coast of Peru (AD 900-1750)*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Ohio State University, Columbus, Ohio.
- 2009 *The Persistence of Identity: A First Approximation of the Muchik Ethnic Substratum of the Late Pre-Hispanic Lambayeque Valley*. Paper presented at the 74th Annual Meeting of the Society for American Archaeology. April 22nd - 26th, 2009, Atlanta, GA.
- 2014 La población mochica de la cultura Sicán Medio: una primera aproximación a un sustrato cultural prehispánico tardío del valle de Lambayeque. In *Cultura Sicán: Esplendor preincaico de la costa norte*, edited by Izumi Shimada, pp. 239-261. Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.
- Klaus, Haagen D., Izumi Shimada, Kenichi Shinoda, and Sarah K. Muno
- n.d. *Middle Sicán Hierarchy, Archaeology, and Skeletal Biology: A Case of Human Biological Variation in an Ancient South American Complex Society*.
- Knudson, Kelly J.
- 2014 La migración en la cultura Sicán: análisis del movimiento poblacional en el pasado usando la geología y la química. In *Cultura Sicán: Esplendor preincaico de la costa norte*, edited by Izumi Shimada, pp. 283-291. Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.
- Kroeber, A. L.
- 1925 The Uhle Pottery Collections from Moche. *University of California Publications in American Archaeology and*

- Ethnology* 21 (5):191-234. University of California Press, Berkeley, CA.
- Kroeber, Alfred L., and Jorge C. Muellle
 1942 Cerámica paletaada de Lambayeque. *Revista del Museo Nacional* 11(1):1-24.
- Lanning, Edward P.
 1963 *A Ceramic Sequence for the Piura and Chira Coast, North Peru*. University of California Publications in American Ethnology. University of California Press, Berkeley, CA.
- London, G. A.
 1991 Standardization and variation in the work of craft specialists. In *Ceramic Ethnoarchaeology*, edited by W. A. Longacre, pp. 182-204. University of Arizona Press, Tucson.
- Longacre, William A.
 1991 *Ceramic Ethnoarchaeology*. University of Arizona Press, Tucson.
 1999 Standardization and Specialization: What's the Link? In *Pottery and People*, edited by James M. Skibo, and Gary M. Feinman, pp. 44-58. University of Utah Press, Salt Lake City.
- Lothrop, S. K.
 1948 Pariñas-Chira Archaeology: A Preliminary Report. In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, edited by Wendell C. Bennett, pp. 53-65. *Memoirs of the Society for American Archaeology*, No. 4. The Society for American Archaeology and the Institute of Andean Research, Menasha, WI.
- Mackey, Carol
 2000 Los dioses que perdieron los colmillos. In *Colección arte y tesoros del Perú*, edited by Krzysztof Makowski, pp. 111-157. Banco de Crédito del Perú, Lima.
- Martínez, Juan
 1997 *Proyecto de Rescate Arqueológico Illimo-Depolti*. Technical report on file at the Museo Nacional de Arqueología y Etnografía Hans Henrich Brüning, Lambayeque, Perú.
- Matsumoto, Go
 2014 *Ancestor Worship in the Middle Sicán Theocratic State*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.
 2017 *Exploring the Multiplicity of Sicán/Lambayeque Society: A Preliminary Study of the Northern Periphery of the Middle Sicán Capital*. Paper presented at International Symposium "Violence, Writing, and Frontier in the Pre-Columbian America", Tokyo, Japan.
 2019 Was Huacas de Sicán a Pilgrimage Center? From the Results of Compositional Analysis by INAA of Serving Vessels from the Great Plaza. In *Ceramics of the Indigenous Cultures of South America: Production and Exchange*, edited by Michael D. Glascock, Hector Neff, and Kevin J. Vaughn. University of New Mexico Press, Albuquerque, NM.
- Metcalf, Peter, and Richard Huntington
 1991 *Celebrations of Death: The Anthropology of Mortuary Ritual*. 2nd ed. Cambridge University Press, Cambridge.
- Montenegro, Jorge
 1997 *Costal Cajamarca Pottery from the North Coast of Peru: Style, Technology, and Function*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University, Carbondale, IL.

Montenegro, Jorge and Izumi Shimada

- 1998 El "Estilo Cajamarca Costeño" y la Interacción Sicán-Cajamarca en el Norte del Perú. In *Intercambio y comercio entre costa, Andes y selva: Arqueología y etnohistoria de Suramérica*, edited by F. Cárdenas-Arroyo and T. L. Bray, pp. 255-296. Universidad de los Andes, Bogotá.

Nicholson, Paul T., and Helen L. Patterson

- 1992 The Ballas Pottery Project: Ethnoarchaeology in Upper Egypt. In *Ceramic Production and Distribution: An Integrated Approach*, edited by George J. Bey III, and Christopher A. Pool, pp. 25-47. West View Press, Boulder, Colorado.

Parker Pearson, Michael

- 1982 Mortuary Practices, Society and Ideology: An Ethnoarchaeological Study. In *Symbolic and Structural Archaeology*, edited by Ian Hodder, pp. 99-113. Cambridge University Press, Cambridge.

Rucabado, Julio

- 2008 En los dominios de Naymlap. In *Señores de los reinos de la luna*, edited by Krzysztof Makowski, pp. 183-199. Banco de Crédito, Lima, Perú.

Shimada, Izumi

- 1981 The Batán Grande-La Leche Archaeological Project: The First Two Seasons. *Journal of Field Archaeology* 8(4):405-446.
- 1986 Batán Grande and Cosmological Unity in the Prehistoric Central Andes. In *Andean Archaeology: Papers in Memory of Clifford Evans (Monograph XXVII)*, edited by Ramiro Matos M., Solveig A. Turpin, and Herbert H. Eling, Jr., pp. 163-188. Cotsen Institute of Archaeology, Los Angeles, CA.
- 1990 Cultural Continuities and Discontinuities on the Northern North Coast of Peru, Middle-Late Horizons. In *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*, edited by Michael E. Moseley, and Alana Cordy-Collins, pp. 297-392. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- 1995 *Cultura Sicán: Dios, Riqueza y Poder en la Costa Norte del Perú*. Edu-Banco Continental, Lima.
- 2014 Detrás de la máscara de oro: la cultura Sicán. In *Cultura Sicán: Esplendor preincaico de la costa norte*, edited by Izumi Shimada, pp. 15-90. Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.

Shimada, Izumi, Haagen D. Klaus, Rafael A. Segura, and Go Matsumoto

- 2015 Living with the Dead: Conception and Treatment of the Dead on the Peruvian Coast. In *Living with the Dead in the Andes*, edited by Izumi Shimada, and James Fitzsimmons, pp. 101-172. University of Arizona Press, Tucson.

Shimada, Izumi, and Adriana Maguiña

- 1994 Nueva visión sobre la cultura Gallinazo y su relación con la cultura Moche. In *Moche: Propuestas y Perspectivas. Actas del Primer Coloquio sobre la Cultura Moche (Trujillo, 12 al 16 de abril de 1993)*, edited by Santiago Uceda, and Elías Mujica, pp. 31-58. Travaux de l'Institut Français d'Études Andines, 79. Universidad Nacional de la Libertad, Trujillo, Perú.

Shimada, Izumi, David Goldstein, José Sosa and Ursel Wagner

- 2003a Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part II: Field Firing Experiments. *Hyperfine Interactions* 150:91-105.

Shimada, Izumi, Kenichi Shinoda, Walter Alva, Steve Bourget, and Santiago Uceda

- 2006 Estudios Arqueogenéticos de las Poblaciones Prehispánicas Mochica y Sicán. *Arqueología y Sociedad* 17:223-254.
- Shimada, Izumi, Kenichi Shinoda, Steve Bourget, Walter Alva, and Santiago Uceda
- 2005 MtDNA Analysis of Mochica and Sicán Populations of Pre-Hispanic Peru. In *Biomolecular Archaeology Genetic Approaches to the Past*, edited by David Reed, pp. 61-92. Occasional Paper No. 32. Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University, Carbondale, IL.
- Shimada, Izumi, Kenichi Shinoda, Julie Farnum, R. S. Corruccini, and Hirokatsu Watanabe
- 2004 An Integrated Analysis of Pre-Hispanic Mortuary Practices: A Middle Sicán Case Study. *Current Anthropology* 45(3):369-402.
- Shimada, Izumi, and Ursel Wagner
- 2007 A Holistic Approach to Pre-Hispanic Craft Production. In *Archaeological Anthropology: Perspectives on Method and Theory*, edited by James M. Skibo, Michael W. Graves, and Miriam T. Stark, pp. 163-197. University of Arizona Press, Tucson.
- Shimada, Izumi, W. Häusler, M. Jakob, Jorge Montenegro, J. Riederer and Ursel Wagner
- 2003b Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part IV: Mössbauer Study of Ceramics from Huaca Sialupe. *Hyperfine Interactions* 150:125-139.
- Shimada, Izumi, W. Häusler, T. Hutzelmann, J. Riederer and Ursel Wagner
- 2003c Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part III: Mössbauer Study of Sicán Pottery. *Hyperfine Interactions* 150:107-123.
- Shimada, Izumi, W. Häusler, T. Hutzelmann and Ursel Wagner
- 2003d Early Pottery Making in Northern Coastal Peru. Part I: Mössbauer Study of Clays. *Hyperfine Interactions* 150:73-89.
- Taylor, Sarah Ruth
- 2002 *Artisan Autonomy in the Middle Sicán State: Variability in Mold-Made Ceramic Production*, M.A. Thesis. Department of Anthropology, Southern Illinois University at Carbondale, IL.
- Tsai, Howard
- 2016 *The "Coastal Cajamarca" Style Did Not Come from the Coast*. Paper presented at the 81st Annual Meeting of the Society for American Archaeology, Orlando, FL.
- Tschauner, Hartmut
- 2001 *Socioeconomic and political organization in the late Prehispanic Lambayeque Sphere, northern North Coast of Peru*, Ph.D. Dissertation. Department of Anthropology, Harvard University, Cambridge, MA.
- Wester La Torre, Carlos
- 2017 Complejo Chotuna-Chomancap: El palacio y la tumba de la sacerdotisa. In *Lambayeque: Nuevos Horizontes de la Arqueología Peruana*, edited by Antonio Aimi, Krzysztof Makowski, and Elimia Perassi, pp. 243-268. 2nd ed. Ledizioni, Milano, Italia.
- Wester La Torre, Carlos Eduardo, Samuel Castillo Reyes, and Fausto Saldaña Camacho
- 2014 Escenarios de Poder y Espacios Ceremoniales: el Trono y la Residencia de Elite en Chomancap Cultura Lambayeque. In *Cultura Lambayeque en el contexto de la costa norte del Perú: Actas del primer y segundo*

coloquio, edited by Julio César Fernandez Alvarado, and Carlos Eduardo Wester La Torre, pp. 271. Emdecosege S.A., Chiclayo, Perú.

松本剛

- 2017 「アンデス斉一説にもとづく祖先イメージの再検討 ―ペルー北海岸シカン遺跡からの発掘データをもとに―」．『古代アメリカ』 20:15-40。

The Mochicas under the Sicán/Lambayeque rule

Go Matsumoto
(Yamagata University)

Keywords: multiethnicity, Sicán/Lambayeque, Mochica, surface survey, mortuary analysis, ceramic analysis

The archaeological studies of the Sicán/Lambayeque Culture has traditionally focused on its more prominent aspects such as the extravagant mortuary rituals practiced by the ruling elites at the ceremonial core of the paramount center, Huacas de Sicán (conventionally known as Batán Grande Archaeological Complex), in the middle La Leche Valley during the most prosperous Middle Sicán period (AD 950-1100), but have not necessarily given due consideration to the social realities of the non-elite, less prominent people. Over the last two decades of research, however, it has become increasingly evident that the Middle Sicán society was highly stratified and multiethnic, consisting of four rigid social classes (higher and lower elites, commoners, and subalterns), as well as four different ethnicities (Sicán/Lambayeque, Mochica, Virú/Gallinazo, and Tallán). It is now inferred that the society was governed by a federation of the groups of the Sicán/Lambayeque elites, whereas the non-elite groups of other cultural identities coexisted with each other, given a substantial degree of autonomy under the Sicán/Lambayeque dominance. In order to achieve a more holistic understanding of the social dynamics of this society, therefore, it is essential to integrate the perspectives of the ruling and the ruled and emphasize both inter- and intra-group variability.

The elite vs non-elite distinction seems to have reflected in the spatial organization of Huacas de Sicán. Some test excavations on the northern periphery of the site, the area known as Huaca Arena, by Shimada in 1990 discovered simple residential architecture of wattle-and-daub (or *quincha*) walls, associated with plain domestic vessels. Most of the non-elite populations are thus inferred to have resided on the peripheries of the site and in other surrounding sites in the region, except for the higher elites who resided in the center of Huacas de Sicán. Nonetheless, there still remain many unanswered questions. How were those non-elite general masses spatially organized within their residential areas on the peripheries and in the surrounding sites? In other words, where did each of the different ethnic groups live? How were the subordinate groups related to the political and religious activities led by the Sicán/Lambayeque higher elites at the center of Huacas de Sicán? This article addresses these questions, referring to the results of (1) the two field seasons of the Proyecto de Investigación Arqueológica Complejo Lambayeque (PIACL), which was implemented at Huaca Arena in 2016 and 2017, and (2) the analyses of the ceramics used during large-scale feasts at the Great Plaza of Huacas de Sicán for commemorating Sicán/Lambayeque ancestors.

The results of surface survey at Huaca Arena support Shimada's view of it as a residential area and suggest that it was occupied intermittently since the Middle Formative period and throughout the Middle and Late Sicán periods (AD 950-1375). During test excavations was found a female body interred in a supine, extended position, accompanied by a stone mace, in a loose sand stratum that contained fragments of the Middle Sicán blackware bottle. This find strongly suggests the existence of the Mochicas on the periphery of Huacas de Sicán under the Sicán/Lambayeque rule. The ceramic analyses, on the other hand, revealed a series of deformations and morphological irregularities on the lip, rim wall, and base of serving vessels and illuminated that the hand-forming processes by the potters were fairly crude and careless. Based on the compositional analyses

of the same ceramic assemblage, a majority of the studied vessels were probably produced at the multi-craft production site of Huaca Sialupe, which lead to suggest that the potters were subordinate people of non-Sicán/Lambayeque cultural identity, most probably the Mochicas. Although it is still an open question whether if the potters had their allegiance to and/or were sympathetic to the Sicán/Lambayeque religious principles as elite dogmas, the evidence of crude and careless work observed on the serving vessels may indicate their indifferent and brusque attitude against the elite religion.

原稿受領日 2019年7月13日

原稿採択決定日 2019年9月29日